

●日本一の生産量誇る

都城市は日本一の竹弓生産で知られ、生産量は全国の90%を占める。

都城地方では江戸時代、志和池や金田で弓作りが行われ、都城島津家にお抱えの弓職人がいたことなどが、江戸時代後期の記録「庄内地理志」にある。明治時代、武道の衰退とともに弓作りも下火となったが、明治中ごろになると、再び武道が認識されるようになった。都城では明治の初め、鹿児島県川内市から楠見善治氏が弓の材料を求めて移住してきたことが、弓作り発展の契機となった。

都城には弓の素材である真竹とハゼの木が豊富にあった。楠見氏は弓作りの免許を持ち、息子蔵吉氏とともに多くの弟子を育てた。このことが都城大弓を発展させ、販路は台湾や朝鮮半島、大陸まで広がり、昭和初期には弓の一大生産地になった。戦後、一時弓作りは衰退するが、

弓道の普及とともに次第に需要が増え、昭和四十年代には業者も三十近くになった。

弓の作り方はまず、細く切ったハゼを芯(しん)とし、竹で両側を挟む。竹とハゼは二べというシカの皮から作った接着剤で張り合わせ、約百本のクサビで締めつけながら、半円状に反りをつける。そして、反りを逆に曲げて弦を掛け、弓の形を整える。逆に曲げることが強い反発力をつくり出すことになるのである。

弓作りの工程は、細かい作業まで入れると三百を超え、一人前の弓師になるには十年はかかるという。

都城大弓は一九八四(昭和五十九)年、本県の伝統工芸品となり、弓師十八人も伝統工芸士に認定された。さらに、九四(平成六)年には八人が国の伝統工芸士に認定されている。

国の認定を機に、業者で「都城弓製造業協同



半円状に反りをつける。弓師は表情が厳しい(弓師は横山黎明さん)

組合」を設立。技術の向上や後継者育成に努めながら、原材料の共同購入、販売促進に取り組んでいる。これは近年多く使用されるようになった安価なグラスファイバー弓と原材料不足に対処するためでもある。

都城市も弓の産地を売り出そうと、八八(昭和六十三)年から毎年、「弓まつり全国弓道大会」を開催、毎回二千五百人ほどの選手が参加、技を競っている。さらに九二(平成四)年からは国際大会も同時開催、九九(同十一)年には十二カ国百八十四人の外国人選手が参加した。国内外での知名度もアップ、今では完全に弓の産地の地位を不動のものにしている。

前田博仁